



にしむら珈琲本店で

■インタビュ― 《珈琲を飲みながら…》

神戸は万華鏡のイメージ

村松 友視 作家 に聞く。

― “神戸っ子純情” というテレビドラマを書き下されて、毎日放送から栗名正博、中村れい子主演で10月23日に放映されました。全部、神戸の街が背景という作品で、村松友視さんが、この春の神戸滞在記のなかからモノになさった訳ですが、神戸は舞台になると思われました？

村松 神戸っていうのは、いわゆる異人館通りのようにシャレたところだけじゃなくて、色んな部分まで含めて街自体が “オープンセット” みたいなんですよ。だから、そこに話をちよっと創ればね、大した話じゃなくても匂い立つて感じの街だなあって思ってたんです。

もう一つは、最初に来た日に知り合った若い連中の感覚ですよ。北野町に店を持ちながら、その自分の店のあり方が、神戸には昔から神戸らしさがあったのに、神

戸らしさに額縁がついちやっただけ……意識しないでも神戸らしさがあったのに、意識した神戸らしさが出て来ちゃって、そういう街になって来ちゃったけど、そういう街の真只中で自分達もそういう街らしいことをやってしまっている（笑）と、自分にじくじたるものがあるから、夜な夜な遅くなると “ソバメシ” みたいなものを食に行ったりして、自分の気持のバランスをとっているのね。そういう、神戸に生れて、神戸に育って、神戸の街が、よそものというか、アンノン族というか、観光的なブームに巻き込まれて、その中において半分はその中で生きている訳だけど、半分はその中で生きたくないという若ものの気持の揺れ動きは面白いなと思って書いてんです。こういう問題っていうのは神戸だけでなく函

館や長崎など、観光というものに対して土地の人が感じる、わりと共通の感覚と通じるから、ちよつと普遍性があつて面白いなと思つて……。

——他所の街の人達に来てほしいけど、犯されるみたいな変な被害者意識もあるし……。

村松 そうそう半分は快感(笑)半分は被害者意識。特権意識もあるかな。自分の街がそれだけに足を運ばせる街だということには、なかば誇らしさを感じている。だけど来てしまった状態自体には眼をつむりたいのに行つたり来たりだよ。京都になると居直つてエラぶつてる。神戸はとまどつている所が見えるだけ初々しいよ(笑)

京都つて高びしやですよ。神戸の人つてのはあれほど他者を低くは見れない。来てくれることによつて街の雰囲気が出て来ているという風な気持も半分はあるんだよね。だけど荒れて来てるなという。ただの道なのに石畳などにしなくていいのにといいのに“つて感じね。

——もともと港町で、船乗りが一夜を明かす出会いと別れのある街ですからね。

村松 だから、ぼく好みなんだけど、男女関係があんまりぐすーつとクサビが打ち込まれた感じじゃなくて、さあつと出会つて、ふあつと感じあつた同士が、一応こうある淡いラブアフェアがあつて、それでお互い傷つかない間に別れて行くという洒落た部分が成立するみたいな感じがするんだよね。何で、さつき逢つた女とこんなに親しくしてるんだろというところもあるだろうし、こんなに親しくしているのに何ですつと別れてしまうのかという、普通、足し算で行くと判りにくいことが、神戸

という街の舞台を持つて来ると納得するような気がする。港町の一つのあり方だろうね。

★ちよつと角を曲ると“書き割り”が変る街

——村松さんは清水港育ち。ミナト神戸と違いますか。

村松 違うね。そこにある要素、店が凄く一杯ある。街並みの種類が一杯ある。港の景色はあるし、高架下はある、要素の数が、神戸の方が全然豊かですね。清水は別の形でいいところあるけれど、一つか二つの色ですーと見える。神戸は色んな万華鏡のようなイメージがあつて、ちよつと角を曲ると違う世界になる。それは凄く劇的で、角を曲ると新しい“書き割り”があるわけ、角を曲がれば“書き割り”が変る(笑)

——いやー上手い表現! “書き割り”の前でドラマを演じないとアカン気分になりますねえ。

村松 歴史があつて、空気があつて、“書き割り”があつて、そこを歩いている人間が芝居つ気もたないとダメだつて(笑)。この十月に神戸を舞台に「メロドラマ」つていうタイトルの小説を書くのですが「メロドラマ」は“ブロレス”と一緒に、それは「メロドラマ」でしようというところ、それは「メロドラマ」はそんな甘いもんじやないという風を持つて行きたい。本来、「メロディー・ドラマ」のことで、感情移入のドラマに音楽が流れるというの、今や通俗的な恋愛劇になって「君の名」は風の、違つたり別れたり「メロドラマ風」といわれている。ところが、本当の「メロドラマ」はもっと苦い味のある、したたかなものだというのがやりたい。「メロ



ドラマ」と正面切ってタイトルつけたところに主張があるというような、これは「神戸っ子純情」のテレビドラマと違つて、神戸にある一つの要素、もつと復元してみた神戸のムードの中にズドンとしたストーリーを持つてきたい。「神戸っ子純情」は神戸の持つ要素を出来るだけ生かしたい。人間をその中で終らせたい。ところが「メロドラマ」では、ある一人の人間を背景に、神戸の色を飾^{かざ}してその中に骨太の人間像バーンとぶち込みたい。片やテレビで、片や映画ですよ。明るい茶の間で見る世界、暗いスクリーンで見る世界ね、神戸というのは両方あると思うんだよね。やっぱり街を歩いてアンノン族が地図を拡げて見る要素と、妙なスリルが背後に流れているような気配……。この要素と五分につるんで生きる男をやりたい。そんな男が酔も甘いもかみ分けて、地面にはいつくばったこともある、虚栄も手にしてる。そういう人間がどういう女に惚れるかというと、芹屋、夙川あたりのまったくリッチなきわめつきの素材がある。実ははどうあれ土地がそのまま女の子になったような女に純愛を感じる。物凄くしたたかで、人を騙し傷つけ、利用した男の、あこぎな神経の果てに感じる「純情」を「メロドラマ」と題して書きたい。主演は悪にお色直しした高倉健さんふうでね。

——テレビで力道山を見て、こんなに胸の中に力道山が存在していたのかと驚き「プロレス」を浮上させたように「メロドラマ」にスポットを当てる訳ですね。

村松 唐十郎さんなんか、「愛」という言葉が死語に近いとすると、唐さんの手で持つて「愛」を掴んで来てふっーと息を吹きかけると匂い立って来るんです。不思議な手品ですよ。ああいう世界ってぼくは好きなんだよねえ。使い古されてる昔の言葉が意識すると匂い立つ。たとえば「様子のいい人」。この言葉一つでずいっと出来るという。「メロドラマ」って言葉も、蔑みの別称でしかないのに、それに金ピカの衣を着せて街に転がしてやろうという……。それから、いずれつつきつめて考えて

みたいなの思っているのは「恐縮」って言葉。今の若い人たちって「恐縮」しないんだよね。自分のやりたい事をやってその気分をそのまま現わして、表現力を身につけているけれど、そこからすっーと身をひいた不思議な男だけしかないみたいな世界ね。女には「恐縮」は似合わないけど、男には「恐縮」する方が合うという大人の世界を攻撃的に書いてみたい。引いてることが攻撃なんだという。プロレスなんかの、相手が6だと8の技があるように引いて見せて10の技でしとめるのと似てるんですよ。自分が引くことによって相手の存在を大きくしとてから、しとめる。そういう手順が男の美学だったけど、それが今なくなってる。

★一陣の風が吹くような……

——北野町のマンション住いの時に初めてお目にかかった時から何か風のような、水のような人だと思議で。

村松 ぼくは自分が好きな人間の男でも、ある部分で風みたいなタイプの人が好きですね。吉行淳之介さんとか唐十郎さんとか。その人が現われると一陣の風が吹いたような……。じめじめしてなくて、さあーとして、そのくせ実体が判らない。ただ肌ざわりが残るようになってのは好きですね。この頃、仕事で飛んだり跳ねたりして、ほとんどその日に出会った人と数人で一晚酒飲むとか、初めて逢った女の人や男の人と、その人の輪郭が見えかけて来たところではっーといなくなる。風みたいに行ったり来たりしてるけど、悪くないんですよ。これは自分の感覚と合ってるなと思うんだよね。

木枯紋次郎みたいなのは、ぱつとその街へ来ると事件が起るけど、ぼくの場合事件がないんですよ、事件が(笑)。風しか巻き起こらないんだ。(笑) 女もなければ事件もない、困ったもんだよ。自分だけ凄じいことがあったみたい、で、風だけが消えてゆくという……。こりやあもう、どうしようもないつむじ風ですよ。(笑)。

岡山の西川緑道公園

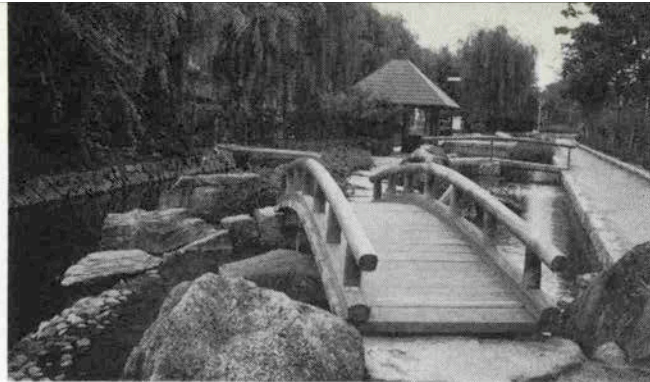
川の復活

米花 稔

△福山大学教授・神戸大学名誉教授▽

時に岡山に下車しても目的地に直行することが多く、今日珍らしく駅前商店街を歩いて粧いをかえているのに驚く。駅地下街百貨店スーパーと集団となって、都心の古い表町商店街をおびやかすという。

約二百メートルを東へぬけると南北に豊かに流れるささやかな用水路がある。それがまた西川（に



たたずまいも美しい岡山の西川

しかわ）緑道公園として生れかわっているのは一層印象的である。惹かれてしばらく緑道を徘徊した。川の両側をふくめて「緑濃い緑道」「水上テラス」「花壇広場」「石張テラス」「噴水広場」「樹木園」「鯉だまり」「菖蒲園」「和風庭園」など白鳥も浮べてつぎつぎとテーマをかえた組合せが西川用水路をよみがえらせている。以前から流れは豊かなが次第に汚染し、近くの家が思い思いの花づくりも一部にあったものの雑然として平凡に流れていたと記憶している。それがまちづくりのひとつの魅力に化した感がある。表示には二・四軒四〇ヘクタールとある。北は国立病院辺りから南は岡山大学医学部辺りまで、中心部の一軒をまず昭和五十一年度に完成し、逐次上下流に延長して最近でき上ったようである。総事業費六億五千万円ほどという。

筆者はかねてから川に惹かれていた。それは科学技術と経済発展に偏って個性を失い勝ちの現代の都市づくりに、自然と歴史と文化による個性を生かすためには、その物的な具体的手がかりのひとつにそこを流れる川があると思うことからである。いまここに川の文

化論を展開する余裕はないが、ここにもそのひとつの試みをとにかく見る思いがした。

岡山は旅人にとっては駅から東西に展開し、山陽道も東西に走っているが、町並みは本来旭川のデルタ地帯として南北方向にたなり町名も北から一丁目、二丁目となっていて、西川用水路もその意味を示している。これはよく知られているポケット版岡山文庫のひとつで宗田克巳著「旭川」が教えてくれた。この用水路も江戸時代新田開発にともなうもののひとつで、下つては産業、生活の用に供されてきたという歴史をもっている。その用水路も公園化するのとそのあり方は変わらねばならぬであろう。

歩いて気をつけてみると、花時計などのほか、昼の太陽光エネルギーを電気エネルギーにかえる太陽エネルギー灯があり、また青年会議所とかライオンズクラブの植樹、電話局職員の退職記念樹などの参加が見受けられる。そして公園化の前提には昭和三十年代からの西川周辺美化推進協議会などの活動もあったようである。

なんといつてもこのようなまちの魅力づくりには、多額の投資、たえ間ない維持管理、さらには健全な環境保持が必要なことを思うと、市民のコンセンサスと参加がなければ成立しないことを思うのである。



□トランペット片手にブラジル一人歩き〈12〉

バンドの 夫人連中

右近 雅夫

〈在ブラジル・サンパウロ／絵も〉

僕は、金曜日の夕方はいつも少し早い目に工場の仕事を切り上げ、急いで家に帰り、夕食後一時間半程睡眠をとることにしている。でないと朝早く起きて夜明け方まで演奏するには、とても身体がもたないからである。ひと寝入りすると、僕は夜の十一時から始まるステージに遅れないよう、家内のマリアをヴァリアンテの横に乗せて夜のパウリスタ大通りをとばして行く。広いアヴェニ

門店を開いている。チビだが親父がムッソリーニの犬の親友だったことを誰彼なしに自慢する愉快な奴だ。

ダの両側には高層ビルがずらりと建ち並び、水銀灯の照明は新聞の字が読めるように明るい。FMが、*Carola de Ipanema* の軽いボッサ・ノヴァのリズムを奏でている。

ピアニストのフィルが夫人と一緒ににこにこしながら僕等の方へやってきた。僕は彼に握手し、ミッシェレ夫人のほっぺたにもキスをし敬意を表した。前にいたピアニストが仕事の都合でリオへ引っ越したので、今度新しく僕等のバンドのピアニストに自分から志望した彼は、フランス人だが北米資本のアイスクリーム会社の社長をしている。若い頃パリで学生時代にジャズをやっていたそうで、サンパウロ・デキシラランド・バンドのユニフォームをつけて僕等と演奏するのが何よりも楽しみのようだ。

コンソラソン街のジャズの店、*Opus 304* に着くと、もうみんな来ており、店内はお客でがやがや賑わっていた。最近僕等のメンバーに加わったバンジョーのブリアが「おお、ジャポネース」といってとんで来るなり、僕の肩を抱きしめ、家内のほっぺたにキスすると、今夜はどんな曲を演奏するのか?と尋ねた。彼は僕と同じく、若い頃イタリアから移住して来てブラジル人と結婚し、嫁さんがアウグスタ街の目抜き通りでシャツの専

クラリネットのジルはいつも開演間ぎわにゆうゆうとやってくるが、サンパウロ交響楽団のメンバーで、夜のオペラを終えてからはせ参じるので遅れてくるのだそうだ。ポルトゲーズのニーナ夫人と二人で住んでいるが、変屈屋で、彼のアパートに行くとき、ステレオの置いてある部屋にはいつも鍵をかけ、嫁さんには指一本ふれさせないよう

にしているそうだ。

僕の家のマリアは「オプス」へ行く時にはいつもついてくる。デキシエを聞くのが楽しいからといったているが、本当は主人に悪い虫が着くのが心配で、見張りが目的で行くのだと思う。ドラマのペドロ・ロドヴィッシの嫁さんのフラミーニアとは大の仲良しで、主人達が演奏している間、ステージの脇の席に坐り、おしゃべりや情報交換に余念がない。フラミーニアは小柄だけれど、スペイン系の血を引いているだけあって、気性の激しい女性である。トロンボーンイグのフェルナンドはアラブだが、嫁さんはちょっとレディ・ダイアナに似たイギリス系の三世だ。ダンスが好きでウイスキーを飲むとだれかれなしにそこいらにいる男をつかまえて踊り出すので、主人の方は舞台の上でいやな顔をしてトロンボーンを吹いている。

「オプス」には場所柄、ジャズを聞くのを名目にボーイ・ハントが目的でやってくる女性もかなり多い。ブラジル語で「デスキッターダ」というが、



日本語に訳せばいわゆる離婚した女性のことを意味する。ある時、インテルヴァーロ（休憩時間）になったので、ステージからおりて家内の側へ行くこうとすると、一人の金髪の娘が僕の腕に手を組むようにして何か話しかけてきた。突然目の前に現われた見知らぬ女に家内は青くなって「私の主人に一体何の用なの？」というのがやっとのことだった。フラミーニアが手にしたカンパリのカップを構かまえて浴びせかけようとしたのでそのデスキッターダは退却してしまった。

家内もフラミーニアも市内のカトリック系の高校の教師をしており、午前中だけ教鞭を取っているが、毎朝八時から始まる授業に間に合うよう、朝早くから起きなければいけない。段々と夜が更けてくるに従い、眠くなってくるのであろう。彼女達はさっきまでのおしゃべりもやめてしまい、しんどそうだ。一方、主人達はラスト・ステージになるとますます熱が入ってきてブンチャカやっている。いよいよラスト・ナンバーの“The world is waiting for sun rise”（世界は

日の出を待っている）の前奏をブリアがバンジョーで弾き出すと、僕は一段とポリュームを上げてトランペットを吹き出した。熱狂した観客が拍手する中を、ふと家内とフラミーニアの席の方に目をやって僕は驚いた。二人が倒れかかるようにしてコックリ、コックリ舟を漕いでいるのである。多分ラッパやドラムがジャンジャン鳴っている間は主人達に悪い虫も近づきまいと思っただけで安心しきった寝顔である。

21世紀の海岸都市

神戸と海をデザインする

□出席者□

吉田 光邦 △日本文化デザイン会議'83神戸実行委員会議長 京都大学教授▽

新野幸次郎 △日本文化デザイン会議'83神戸実行委員会副議長 神戸大学教授▽

末次 攝子 △日本文化デザイン会議'83神戸実行委員会広報委員長 大阪府 参与▽

大高 猛 △日本文化デザイン会議'83神戸実行委員会テーマ委員 デザイナー▽

— 21世紀の海岸都市をどうデザインするか。来る11月24日(水)、25日(木)の2日間にわたって、シンポジウム「日本文化デザイン会議'83神戸」が開催されます。これはアメリカのコロラド州アスペンで開催されている「アスペン国際デザイン会議」を日本でも、という意図で、80年に横浜で誕生し、仙台、金沢で開催したのち、今回の神戸で第4回を迎え、ますます充実したものとなることが予想されています。神戸会議では「海は広いか、大きいか」をメインテーマに各分野の第一線の文化人(梅原猛座長)のほか、兵庫県下からも市民、学生、行政関係者、ビジネスマン、学者、作家が参加し、ポートアイランド国際会議場や農業会館など神戸市内の各地で、神戸の海から海洋開発まで、海をめぐる多角的な話し合いが行

なわれます。今回は、その関係者の方々にお集まりいただき自由なご意見をお願いしたいと思います。

★海岸都市、神戸を舞台にくり広げられる知的祭典

吉田 日本文化デザイン会議に私が参画するようになりましたのは、昨年の金沢会議からで、この時は「あそびの再発見」というテーマで、草柳大蔵さんを議長に、実にさまざまな話し合いがなされました。今回の神戸会議では「海は広いか、大きいか」をテーマに市民ぐるみ、街ぐるみの祭典がくり広げられますが、私も非常に楽しみにしている次第です。

末次 今までの例から見ると、参加者に学生やヤングが多くて壇上のパネラーと会場の参加者とが一緒になって



吉田 光邦さん



末次 摂子さん

語りあえる雰囲気がとてもよかったのですが、神戸は学生が多い街だから今まで以上に盛りあがりそうですね。
吉田 神戸という街はミナト町であり、いつも未来を見つめているというイメージがあります。それに神戸まつりに見るように、神戸は神様がいらなくても祭りができる不思議な魅力に溢れた街です。ここで海を語りあうというのは興味深いことで、私の受けもっているプログラムでは「海のあやかし」というテーマで話合います。海は竜宮城の話でも知られるように、人間にとって永遠の別天地なわけです。古今東西の伝承されるさまざまな海のイメージを歴史的にたどってみようと考えています。

大高 私は「生活の中の海」で「海を食べる」と題してシーフードについて自由に論じようというわけです。日本人の体質とシーフードや、世界の食生活、漁業や資源の問題など、生活と切り離せない「海」を大いに語ろうと意気こんでいます。また、全体のプログラムの中で、「海の近未来」では、竹内均さんなどによる海の科学的な分析や「海を拓く」と題して人工島や海洋牧場などが話されますし、「海とデザイン」では黒川紀章さんや多田智満子さんによる「みなとまちのデザイン」、彫刻家

の増田正和さんなどによる「まちの楽しさ」と題した環境とアートの討議が行なわれますが、他に映画コーナーがあり、田中一光さんなどデザイナーによる特別コーナーやコンサートなど実に多彩なプログラムで構成されています。

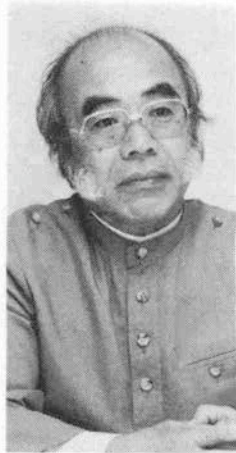
新野 開会式の時の基調講演と、1日目の講演会の2回にわたって陳舜臣さんが話されますが、これも興味深いですね。

大高 2日目のリレー講演会では他のプログラムで話し尽されなかったものなどを話題とすることができるようになるべく考えられています。また、さよならパーティーがポートアイランドで行なわれるというのも、神戸らしくて面白い趣向だと思います。内容もさることながら、神戸だからできるという何かを期待したいですね。

末次 私も今回の神戸会議では、仙台や金沢とは一味ちがったものが生まれるのではないかと期待しています。中央からくる参加者たちは、どこかしら地方に君臨するといった雰囲気があり、受け入れる側も地方から中央をおおぎみて、中央文化に浴したいといった観がありました。けれども、神戸はひらけた都会人の心としたた



新野幸次郎さん



大高 猛さん

かさを持っていますね。面白い展開を見せるでしょう。

吉田 今までの出席者の中にも関西の人は非常に少ないですね。文化デザイン会議といっても、地方の都市に東京文化の出店がでるような観があります。

新野 今回は、たまたま神戸で開催されますが、京都、大阪、神戸の3都市が協力して神戸を舞台に会議を行なうわけですから、文化デザインとしての意義も大変深いといえるでしょうね。

大高 神戸会議では「海」をメインテーマに展開されるわけですが、神戸では海に対してあまりにも馴染みがありすぎて、むしろ、海以外のことをテーマにした方がよかった感じもありますね。私たち、神戸に住む人間にとっては、今更に海だなんて思う。しかし、東京の側から神戸といえ、短絡的に海を連想するわけなんですよね。かといって、他の都市において、「海」という大きなテーマをどこまで多角的にとらえることができるかという疑問なわけです。だから、短絡的かもしれないけれど、「海」を語りあえるのは神戸において他の都市ではありえないと思うのです。また海が、今回のように複合してあらゆるジャンルの人が自由に論ずるというのは、画期的なことだと胸を躍らせています。

吉田 横浜、金沢会議では、「共生の時代へ」や「あそびの再発見」など、どちらかといえば、流行のトピックを追うようなファッショナブルなテーマで、手軽な印象を与えるようなものが多かったのですが、「海」というテーマは、太古から人類全体にとって永遠の命題ともいえる大テーマなわけです。

私は、この大テーマが、他の都市でなくて神戸で論じられるという点で、今までの日本文化デザイン会議のあり様に何か、非常によい刺激をもたらし、会議の今後の流れを一変させるのではないかと期待しています。それと同時に、日本の各地でこれだけの規模の催しを行なうわけですから、出席する各メンバーも社会的な責任というものを考えるべきです。最初はそれぞれが好きなこと

を言い散らしていたにすぎないところもあり、神戸会議をきっかけにそろそろ実のあるものを意識して論議するといった方向に切りかえていかねばならないという気がします。というのは、昨年の金沢でもそうだったのですがマスコミで華やかな活躍をしている人たちが、いわばスターたちがずらりと並ぶというのが一つの魅力になったという段階で終わってしまったという。話題性としては大変いいことなのですが、これでは文化デザインとしての意義が半減してしまうわけです。

新野 そういう意味では、今回は吉田先生が議長に、副議長には多田道太郎先生もおられて、関西の地元の先生方が企画されたものですから、新しい動きの一つかもしれませんね。特に面白いのは古いテーマである「海」をこの企画にくみ入れたことです。よくいわれるように、海は生物学的にも人類の源であり、かつまた自然を代表する海が人間の生活に深いつながりをもつわけですから、海を考えるということは、創世紀から現代、さらに未来の人間をたずねるということではなければならない。また、海をめぐっているいろいろな国々があり、さまざまな資源の問題があり、しかも海の汚染が進む状況の中で人間のあり方を改めて考える必要があります。その点で、海は非常に現代的であるとともに根源的な問題でもあるわけです。ですから、「海」をテーマに論ずることはとりもおさず、「人間」を見つめなおすことになるのではないかと考えているのです。

吉田 それで思うのは、今の若者は海を知らないなあという点です。外国へ行くにも飛行機で空を行くわけですが空ばかり眼中にあって、海をかえりみない、大海原を船で何カ月もかけて旅をするということがなくなってしまうために、海との対話を体験した人がとても少なくなってしまうのは残念なことです。

新野 戦前では、外国へ行くといえば、すぐに船旅を考えました。20年ばかり前に私は文部省留学でイギリスまで30数日ばかりで渡りましたが、これがいみじくも最後

の船での海外留学となりました。

大高 以前 神戸で「さんふらわあ」の船上でファッションショーを開催したことがありました。海上をいく船の上でのショーということ、非常に壮快な気分の企画だったのですが、結局、ショーの行なわれている間は海がまったく見えないで終ってしまっただけ。この時は大変惜しい気がしました。

吉田 現代生活では、海をすっかり忘れてしまっているという懸念があります。最近、もっぱら海洋開発などに気をとられて、魚がとれるか、マンガンがとれるか、ということばかりが問題になりすぎていて、海と世界という概念は消えてしまっているわけです。船による海外旅行でまわりがすっかり水平線になるという感覚は、今ではもう誰も知らなくなりましたね。

新野 海というのは、昔から恐ろしい世界なんだとされてきましたが、恐ろしいという感覚も鈍くなってしまいました。

末次 ほんと日本ほど海で囲まれた国は少ないのに、考えてみると海が身近な存在とはいえなくなりましたね。

大高 ポートアイランドはまさしく海と人間の接点にあたるようなもののなかに突堤が高く崖のように切りたつていて、波打際がない。

吉田 シーショア（浜辺）の感覚が失なわれていますね。

新野 神戸ではどうにか須磨の海浜が残されているんですが、宮崎市長は、これだけは何としても残すと仰言っています。

吉田 昔ながらの海水浴という概念も今はありませんね

新野 私どもは神戸で「汎太平洋フォーラム」を発足させまして、私立大学、国公立大学あわせて9大学が参加しているんです。これは、太平洋とその関係諸国の自然と人間に関わる問題を参加大学が共同で調査研究しようというものです。太平洋は世界の海の半分以上を占めており、39の国々が太平洋に面していて、しかも、国連加盟でない国々が多く集まっているんです。大きな国との

経済的な交流がありますが、これら小さな国々を太平洋という海を介して、その関係を開発していくことは大変意味のあることであると同時に、海を見直していくポイントになるのではないかと思うのです。

大高 神戸会議でも、太平洋の各国から参加してもらえたら面白いですね。

新野 汎太平洋フォーラムでもそれを考えているんです。太平洋をはさんで、オーストラリアやニュージーランド、パプアニューギニア、フィリピンなど9つの島々から9つの大学の学長を呼んで、神戸で会議ができれば非常に面白いと思っています。

★神戸会議をきっかけに関西文化デザイン会議の発足を
末次 兵庫県は日本海と瀬戸内海と2つの海に囲まれていて、山の緑も深い。食べ物も素晴らしい。鯛があつてカニがあつて、三田ではお米、マツタケがとれるし、神戸ビーフも美味しい。お酒も珈琲もそれに最近ではワインができたそうなんです。

大高 神戸市の西区にできた神戸ワイナリーですね。私は神戸ワインのシンボルマークの審査委員長をしたんですが、西区のワイン工場も実に素晴らしいものです。

末次 ワインといえば、北海道の十勝ワインを創り出した池田町。吉田先生もほめていらつしやいましたね。私

一週間前に行つて来たんです。町営のワイン工場、昭和36年からだそうですが、年産230万本。新酒がとれると、5月まで6カ月間、成人一人にロゼ・ハーフボトル4本ずつプレゼントがあるんです。10月2日のワイン祭の準備で賑やかでした。人口1万2000人の町。

夏場の観光客、60万人。

吉田 町役場の経営するレストランもあつて、町でできた肉を食べられるし、65歳以上の高齢者には陶芸を学んでもらつてワインのボトルを作っているんです。

末次 町営生きがイセセンターでボトル以外にもお茶碗や鉢子など自分の好きな物を作って自由に値段をつけて売

るんです。売れた場合は、半分は生きがいセンターに納め、半分は自分のものになる仕組みなのですが、お年寄も楽しそうでしたよ。

新野 新しい文化のバターンが、地方でどんな生まれてきているわけですね。それも自分たちの手づくり的な発想だから成功しているといえますね。

末次 池田町では結婚すると町役場から贈られた落葉松の苗を植樹して、銀婚式のころにはその木を売れば、フルムーンで海外旅行ができるように考えられていますし、牛を飼っている農家では雄牛を町営牧場に渡すと、月に何キロかずつ配給がある。ミートバンクですね。大都市はそんなことができないといわずに住んでいる人たちに對して、きめこまかい気づばりをしてくれるような政治をしてほしいものです。

新野 それには女性のアイデアを活用しないといけません。

末次 嬉しい、そうですね。これからは文化はもとより、行政の中にどしどし女性の発想を生かしてもらいたい。兵庫県、特に神戸は女性の力が強いところだから、大いに期待できますね。

新野 離生協が生まれた土地ですし、市の婦人団体協議会が10万人も組織されています。

大高 消費者が商品をテスト販売する時は神戸で行ないますし、パッケージの過剰包装についても神戸が始めた運動です。

新野 生協は兵庫県下で約50万人の組織で、これは世界で4番目にあたる大きなものなんです。最近、イギリスなど諸外国の方が生協の生活文化センターを視察されたのですが、その時非常にうらやまがっておられたというの、生協の元祖的存在であるイギリスでもこれだけの立派な施設はできないというのです。生活文化センターは地域社会における健康増進と生活文化の活動の拠点として作られたのですが、体育館もあり中西勝画伯の母子像のステンドグラスや増田正和氏による壁面構成

の空間や、貝原六一画伯の緞帳など、これほどの規模のものは世界に類のないものだといわけです。そういうことができるのは関西独特の発想だといえるかもしれません。

大高 関西は国鉄、阪神、阪急が平行して交通網を構成して輸送の密度が高いために、情報も早いから意見統一も早く、それだけ動きも活発になるからでしょう。

新野 神戸ではいち早く神戸婦人大学というのが生まれ、とても好評を得ています。これは、3年間にわたる一般向けのセミナーなのですが、講師陣も彫刻家、画家、音楽家、学者など一流の方ばかりで、講義内容もバラエティーに富んでおり、いわゆる四年制の大学にも劣らない水準で非常に人気が高い。この婦人大学のようなものを東京でも作ろうという動きがありました。が、どうもうまく行かなかつたんです。東京ではスムーズにできなくて、どうして神戸ではできたのかと聞かれましたよ。

末次 すばらしいこと。とにかく神戸は人が集まりやすいし、パーティ好きですね。

新野 婦人大学と同様に、今回の神戸会議をきっかけとして、関西で何かを始めたいかがでしょう。たとえば年に何回か大阪に集まって「雑談会」を開いたら面白いと思います。

末次 それはすてき。そうですね、神戸を中心に関西文化デザイン会議を発足させる、というのはいかがでしょう。

大高 神戸なら、実現の可能性は高いですね。

吉田 金沢会議で感じたのですが、日本文化デザイン会議が一種の知的なお祭りとして開かれたあとで、のちに遺産を残せるようにしたいですね。さきほどの意見のように、文化デザインについての話合いが開催地に根づいて、自然な形で研究会のようなものが生まれてきてほしいものです。今回は、神戸で開かれることもあって大いに期待しています。

田崎真珠株式会社

取締役社長 田崎 俊作
神戸市中央区旗塚通 6-3-10
TEL (078) 231-3321

オールスタイル株式会社

取締役社長 川上 勉
神戸市中央区伊藤町121
TEL (078) 321-2111

カネボウベルエイシー株式会社

取締役社長 稲岡 必三
神戸市中央区三宮町1丁目9-1-807
センタープラザ東館 8F
TEL (078) 392-2101

株式会社ベニヤ

取締役社長 松谷 富士男
神戸市中央区三宮町1丁目10-1
TEL (078) 332-3155

モロゾフ株式会社

代表取締役会長 葛野 友太郎
神戸市東灘区御影本町6丁目11番19号
TEL (078) 851-1594



11月24日(木)

21:00 19:00 18:00 15:30 15:00 12:30 11:30 10:00

アトラクションー海のコンサート

(榎本了彦)

国際会議場
メインホール

海のあやかし
—海坊主から北斎の大ダコまで—
(吉田光邦・松井賢・松田清・野村雅一)
国際会議室

海を拓く
—人工島、海洋牧場、飛行場など—
(菊竹清訓・クレバシ・藤川健太郎)
(大山順彦・佐野雄一郎)
レセプションホール

まちの楽しさー環境とアート
(多田美波・針生一郎・木村重信)
(福田繁雄・増田正和)
国際展示場 2 F ⑥

関西は文化の胃袋だ
—大衆文化のルーツ—
(多田道太郎・上田篤・横尾忠則)
中会議室 (401号室・402号室)

神話の海
—古代人は、海の向こうに何を見たか—
(梅原猛・山本七平・栗田勇)
国際会議室 (400名)

海を探索
—海底活動・資源・エネルギー—
(合田周平・竹内均・坂倉勝海)
(本間琢也)
レセプションホール (300名)

みなとまちのデザイン
(山崎泰孝・馬場瑠造・黒川紀章)
(恒成一訓)
国際展示場 2 F ⑥ (700名)・

シーフード
—海を食べる—
(坂根進・大高猛・玉村豊男)
(近松文子・小川忠彦)
中会議室 (200名)

海と歴史

海の近未来

海とデザイン

生活の中の海

映画コーナー

特別コーナー

開
会
式

司会
・末次攝子
代表あいさつ
・梅原 猛
基調講演
・吉田光邦
記念講演
・陳 舜臣

国際展示場
2 F ④

映画を通して見る異文化の交流
映画——「恋の浮島」「戦場のメリークリスマス」
(大島 渚／高野悦子／大森一樹)

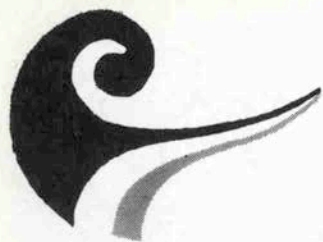
農業会館 (500名)

講演会
陳 舜 臣
勤労会館

ビジュアルデザイン講座
(田中一光・栗津 潔・永井一正)
(勝井三雄・福田繁雄)
このハコのみの整理券(2,000円)も発行されます
ワールド研修センター(新神戸駅前)



●日本文化デザイン会議'83神戸11月22・25日開催
海は広いか、大きいか
—神話の海から
海洋開発まで—



11月25日(金)

19:00 17:30 17:00 15:30 15:00 12:30 11:30 9:00

さよならパーティ

【シーフードまつり】

閉
会
式

司会
・新野幸次郎

総括報告
・吉田光邦

日本文化デザイン会議賞授式
・黒川紀章

□日本文化デザイン会議'83神戸

主催 日本文化デザイン会議

後援 兵庫県・神戸市・文部省・国際交流基金・神戸商工会議所他

●参加費／一般 一〇、〇〇〇円 学生 五、〇〇〇円

●申し込み・問い合わせ先

〒650 神戸市中央区京町69 三宮第一生命ビル

博報堂神戸営業所内日本文化デザイン会議事務局

TEL 078(332)7978・(392)3612

●参加登録券販売所
神戸新聞会館ブレイガイド／さんちかブレイガイド

市民広場
(モニュメント広場)
or
国際展示場
2 F(A)

国際会議場
メインホール

海の門、オーシャンゲート
—宮島・金比羅など—
〈渡辺豊和・村松貞次郎・栗田勇〉

国際会議室

海からの日本
—日本にとって海はプラスかマイナスか—
(芳賀徹・李御家・アンドレ・ブリュネ)
栄久庵恵司

国際会議室

コンピュータ・グラフィックス
とコミュニケーション
(河原敏文・ロバート・エイブル・泉真也)

レセプションホール

地球をめぐるコミュニケーション近未来
(合田周平・坂下 清)
後藤和彦・式場 英

レセプションホール

海にとりつかれたクリエイターたちは
—北斎・フルベなど—
(粟津潔・高橋秀爾・鈴木博之・朝倉雄)

国際展示場 2 F(B)

デザインが海を越えたとき
(永井一正・安藤忠雄・田中一光)
吉田光邦・小池一子

国際展示場 2 F(B)

港町・文物ロード
塩の道・酒の道 コーヒーの道・木綿の道
〈草柳大蔵・北本正孟・永畑恭典・柚木 学〉*

中会議室

中会議室

民族フィルム タイトル未定

〈牛山純一・その他〉

農 業 会 館

—海を語る— リレー講演会

〈榎本了志・糸井重里 他 小学生・船長・冒険家 等〉

勤 労 会 館

市民・県民フォーラム みなと町文化考
(黒川紀章・田村 明・山本敏雄・小泉康夫)
(服部 正・森本泰好・能村龍太郎)

国際会議場

メインホール(700名)



● Kobe free town

これが私のフリータイム〈自由時間〉

遊びは人生の 粹な味付け

高橋 洋二〈高橋兄弟商会常務〉

昭和五十四年頃、事情で一年余り諏訪山に住んでいた。毎朝、幼稚園に通う下の娘と一緒に、山本通一丁目の仕事場まで歩いて通勤したが、帰りはチョット一杯やりに行くことが多かった。それまでの生活では、住居が仕事場と同じ場所だったこともあって、まず、夜の街へ飲み、それも一人で出かけることなどなかった。だから、一種の解放感も手伝って、それは実に魅力ある時間だったと言える。

今でもよく行くが、「コリーナ・ドロー」は、マスコミ関係の人間

も多いが、場所柄、真珠業界の間もよくやって来ていた。そして二十代後半から三十代の客が多い為、店内で知らない客同士が言葉交わす機会も多かった。ただ、山手にはもう一軒、古くから真珠業者のよく行く「山の手」もあるが、どちらかというとそちらは社長クラス(年配組)の行くところ。

我々はどちらかというと若手だ

めったに飲みに出ることがなかったためにそれまで同じ業界にながらお互い知り合うことのできなかった多くの人間と出会った。

彼等と話し合ううちに、意気投合してグループができた。グループができる活動が生まれ、活動が生まれると、それは運動になっていった。こうして生まれたのが「真珠の街神戸を考えるプロジェクト会議」であり、パールシティコウベのキャンペーンである。

現在は別の会場で会合を開くようになったが、毎週金曜日ともなると「コリーナ」に集まって、看板時間を過ぎるまで、熱っぽく、明日の時代を論じ合ったものである。今では共鳴する人の輪も神戸の真珠業界全体にひろがり、仲間も増え、運動はグループ活動の範囲を越えたと言えるけれど、まだまだ始まったばかり、メンバー一

同はこれからだとますます張り切っている。

確かに、アルコールが入ると、気が大きくなって発想も自由になるようだ。酔っ払わない程度の酒と会話は創造的だということか。

今でも、「プロジェクト会議」の会合は缶ビール片手で行われているが、あながち無意味ではないのかもしれない。

アルコールの効用には、遊び心を刺激するという面もある。先のグループとは意味合いも内容も全く違うグループに「神戸ヒゲクラブ」というのがある。こちらは、種々雑多な職業の持ち主だが、ヒゲを生やしたという点で共通した人間の集まりで、毎週第二土曜日例会を開いている。欠席者や出席義務時間帯に出席できなかったメンバーは、理由の如何にかかわらず厳しく罰金を払わねばならないという会則があり、各自のヒゲ写真の入った会員証もユニークであ

る。ヒゲと性格、ヒゲと芸術、ヒゲの市民権等、陽気なヒゲ面が訳の分かったようで訳の分からない

議論を戦わせては騒いでいるが、酒による遊び心がなければ、こんなクラブは発生しなかったに違



(左) 夜の北野・異人館通りにて。取材同行は、ヒゲクラブの増田さん(右側) (上・左) ティファナのマスター、玉利さん(右端)と(同・右) 夜の北野坂(下・右) パーバリーコーストにて。タイトル上の写真も同店にて(同・左) コリーナ・ドーロにて。

ない。

発足の頃は、メンバーの中にメキシコ風レストラン・バー「ティファナ」のマスターが居て、そこを例会場にしていたが、あまりにうるさいのと、むくつき男集団のため最近では、やはりメンバーの一人が経営する地下の穴蔵のような店、「パーバリーコースト」で例会を開いている。

酒祭りや、年末のヒゲパーティーなど、外部の人達と接触する機会もあるが、一種異様な集まりだけに、世間からの認知には、まだまだ時間を要するものと思われる。

限られた生活空間で、人は限られた時間を有効に使わねばならない。殊に、アフターファイブの使い方は人生の味付けを大いに左右するだろう。人生に遊びは不可欠だ。のんびんだらりと無目的に遊んでいるばかりでは心身共に弛んでくるが、集中的に「こたわって」遊べば、生活のアクセントとして有効だ。

何もヒゲを生やせとは言わないが、人並の生活能力がある限り、人それぞれ、自分自身を大切に、適当に自己を主張して生きてゆけば、結構楽しい人生が過ごせるのではないだろうか。

ただし、男たるもの、家庭をおろそかにしてはなりません。

これ、常識!!



「ダダダ……」ある時は夜中ミシンの音を響かせ、またある時は生地やアイデアを求めて歩き回り……。

アフターファイブといっても、私の場合は日々様々です。今日は一段落ついたのでお昼から三の宮をブラブラすることにしました。

——あいにくの小雨の中、まずはじめは「スウィング」へ。スウィングは、イタリアを中心としたヨーロッパものが、巾広くそろっているお店。いつも新鮮なファッションはとても参考になります。ヒゲの春さんと陽気なお兄ちゃんが元氣よく迎えてくれ、生地やデザインについてケンケンゴウゴウ、ひとしきり話すといつの間にか痴話ばなしに。アツという間に時間が過ぎ去っています。このあたりは、新しいお店もでき始め、中心街にも近く、これから楽しみなところで。

最近愛用している服は、妹の作

●Kobe free town

これが私のフリータイム《自由時間》

太陽の下は

アイデアの宝庫

山西 宏美（オリジナルスボーツウェア）

った服が古着。よい古着を求めて遠出をしたりもします。が、神戸ではなんといっても「大石商会」。

皮ジャン、レースのドレス、アクセサリー、etc.。ここは掘り出し物の宝庫です。また、毎月一回須磨寺での骨董品の市をはじめ、その他モロモロ、大石のおっちゃ

んはなかなかのアイデアマンです。「今なんかおもしろいもんある？」

「おっちゃん（自称大学生）曰く、「顔だけやなあ」なんのなんのその足もとには、私が前からほしかったアンチックな皮のトラン

ク。な、なんと二五〇〇円。「きやあーっ」飛びついてよく見ると・一〇〇〇円手付金」という紙が。どこのだれだ……!! ショックなことでありました。

ここらでちよっと一息ついて、甘いものでも。がまんしようと思ってもやめられないのがケーキと

パイですねエ。特に『マイケルジェイズ』のラズベリーパイが大の

お気にいり。あのつぶつぶがたまらないのです。11月から苦楽園に場所を移し、フランス料理等も加えて、『マイケルジェイズ倶楽部』となってオープンすることになりああたかもドライブコースに加わることになりそうです。

フリータイムはいつもブラブラしているわけではアリマセン。気が向いた時には夕食前にジョギングをし、ダッシュやフットワークなど、体力作りをしています。テニスウェアを作ったりしてのけど本当にのめりこんでいるのはバスケットボールとスキーです。雪が降るのを楽しみに新しいスキューエアをせっせと作っています。バスケの方は高校時代の仲間たちとチームを作っています。その名は「武陽会」。(強くもナンともありません) 気のあった仲間との練習はホントに楽しいひと時です。コートの中を駆け回り、気分はいつでも18才。おばあさんになるまで



中央／何よりもスポーツを愛する彼女 右上／初めて洋服を置いてもらった店「スウィング」にて。妹の真理さん（右端）と 右下／新装される「マイケルジエイズ」のユニホームは彼女がデザイン 左下／古着屋の大石のおっちゃんはアイデアマン！ 左上／「憩」の場、となるキングスアームス

続けたいと思っています。ポートアイランドでの練習の帰りはキングスアームスへ。ゆったりとしたお店のたたずまいに思わずくつろいでしまい、昔話に花が咲きます。静かな店内にバカ笑いが響きわたり、まるでガメラ対ギヤオスの会話であります。

このように色々な時間を過ごしていますが、やはり「ホツ」とさせてくれるのは、体を動かしたり、自然に触れている時で、「生きていく」という充実感を満たしてくれるような気がします。

最後に今一番凝っている遊びを紹介しますと、季節はずれの潮干狩り。夏のにぎわいがうそのように閑散とした、9月末の浜辺に集まって来るのは通（？）とみられる家族づれが2、3組だけです。潮がひいた夕方4時から約一時間

半でバケツ一杯の大漁です。我を忘れてはしゃぎ回った、私の右半身はビショぬれ。でも、ちょっと寒いのがまんすれば、こんな健康的な遊びはないですよ。たまには子供の頃にかえって思いきり遊ぶのもよいものです。年をとるごとに、純粹な気持ちの仕事にも必要になって、「遊び」がステキな宝物のようにさえ感じられてきます。

今、次の日曜日に向かってあさり取り器を製作中の私です。



勤務先は、ミニ出版社である。学習研究会教文社、教育図書が専門で、事務所は元町駅北側の私学会館の中にある。

ふだん、市内のあちこちを走り、人に会い、ほんのすこしのデスクワークをして一日が暮れる。自動車通勤しているから、帰宅途中にどこかへ寄るといことはあまりしない。自然、元町駅周辺の、それも歩いて数分ていどところが行動範囲となる。しかし、私にとって、ここは実に便利な街なのである。

まず本屋、ちかごろ新刊書は、仕入冊数のせい、朝刊に広告が出て、翌日売切れということがよくある。

一番近いのが日東館と丸善、ここになれば海文堂、少々足をのばせば漢口堂とジエック堂、これだけ巡れば買い損うことはめつたない。

● Kobe free town これが私のフリータイム〈自由時間〉 元町で出会った 仕事と恋と友情と 三宅 武〈詩人〉

レコードは、魚崎に住んでいたころ、三宮駅北のマスダ名曲堂で買っていた。クラシックしか置いていないが、在庫の種類と店主の商品知識は第一級だと思う。店はさほど広くはない。倉庫を広くとっているのだろうか。カウンターに、分類カードが積んであって、欲しい盤はすぐ出してくれる。不特定多数の客が手を触れることが全くないのだから、レコードという商品の性質上、最も適切な保管法だといえる。店名をカタカナにして

いるのはコンサートマスターをもじったのだそう。

帰宅の道順が逆になったため、今は元町本通の日本楽器をのぞくことが多い。整理が良いので選びやすい店である。

私学会館から百メートルほどの圏内には、喫茶店が十軒ほどある。まずい店はさすがに一軒もないが

一風変わっていて味がとびぬけているのは元町東口山側の「珈琲屋羅旬區」である。りいぶるという書店の二階にあるからすぐわかる。

時代ものの置時計やランプがびっしり置かれていて、ランプは「洋燈」と表現したくなるほどの味わいがある。グラスもカップも凝ったものを使っているから、店の人はずいぶん肩のこる思いがするにちがいない。買ってきた本をひろい読みしているとき、アンティークな時鐘がチンと音を立てたりすると、駅前ビルの二階に坐っていることなど、完全に忘れてしまう。

「現代誌神戸」や「詩誌第三紀層」の例会・出版記念会などは、たいいてい県民会館を利用する。終わったあと、坂を下って二次会ということになる。

これも元町周辺である。総勢が二十名ほどになるから、全員腰かけることができる店としては、高



右ページ/日本楽器でレコードを選ぶ。左ページ・上右/「羅旬区」でマスターと談笑。上左/「羅旬区」では駅前ビルの2階であることを忘れてしまう。
下右/高架下の「寿海」で詩を書く仲間たちとカンカンガクガク。下左/夜の元町商店街を歩く。左/日東館で趣味のプラモデルの雑誌を見る。

架下の「寿海」がいちばん良い。湯豆腐、焼鳥、関東煮、めざしで一刻をすごす。飲めぬひとが二人混っついていても、おかずと番茶で酔った気持になれるらしい。

不思議なことに、料金が、一人当り千円を超えたことがない。店主夫妻も板前さんも、さっぱりとした人柄なので、大勢で飲むのも、一人でもちよつと飲むのも、実に気のおけない店なのである。忘年会などでもできる二階がある。

フリータイムに、一番楽しいのは仲間に出会うことである。そのほかは、書店とレコード店をのぞき見ることと喫茶店ぐらいなものなのだが、いい齢をして、これではまるで二十代から少しも進歩していない。

昭和ひとけた族は遊ぶのが下手だとよくいわれる。私も、そのうちの典型的な一人なのだろう。旅行にしても羽根をのばせず、スポーツも上達せず、楽器はさわれずなのだが、それでも元町周辺を歩いていると、仕事も恋も友情も、そして多くの詩人たちとの出会いも、全部がこの街並の移り変わりとともにあったのだと思いたるのである。



● Kobe free town

これが私のフリータイム〈自由時間〉

肩ひじ張らんと 楽しいいこうよ

小山 乃里子〈ラジオタレント〉

スタイルビルの「ともえや」はいつのまにか「KENZO」なんて名前になり、店内もゴロリと変っていた。

変ってないのは店主の顔だけ。もう改装して一年になるといから、それ以上のぞいていない事になるのに、ニコツと楽しい笑顔でむかえてくれた。

私の買物は、時と場所を選ばない。目の隅に好きな色が入ったら、とりあえずふらふらと店に入って行って、たまたま「うわぁー、ノコさんでしよう。声ですぐわかりました、いつもラジオ聞いているんですよ。」なんて言われようものなら、まあ十中八・九、その品物はお買い上げ——という事になる。

「ともえや」も、とえ、「KENZO」も、店員さんが番組宛にハガキをくれて、一度来て下さい、というのが付き合ひの始まりだった。いや、もっと前からちよい

ちよいのぞいていたけど、一層の親しみを持つようになったのかも。しれない。

女っぽいスーツが目に入った。

赤紫のもよう、青紫のもの、色違いで、青系の方が良いかな。いつもなら、気に入ったらすぐ買っちゃう方だが、まだ北野町もぶらつきたいし、「又来るね、あらっ、はきやすそうな靴あるじゃない、今度ゆっくり……」。

タクシーで北野町の異人館倶楽部までは「メーター。とんとんと二階の「ナタリー」へ。」

私の最近つけているアクセサリーは、ほとんどがここで買ったものである。店主の目下チャンの顔が見えないと思ったら、只今パリへ仕入れ旅行中とのこと。又面白いもの見つけてくるんだろうな。シンプルなセーターのえりもとにびったりというパールのカラーを買った。

そうだ、久し振りにローズガ-

デンものぞいてみよう。

イッセイさんとこ、なんかいいかなあ。出来た頃は、一カ月に一度は、フラストレーション解消と称して、ここの地下から三階まで歩きまわり、うわぁーつと買ひ物をして、ついでに中庭の「サム・ホール」でバラを買って帰ったりしたものだったのに、最近とんとご無沙汰である。



雨に唄えば…

イッセイさんそこにはあまり食欲をそえられるものなかった。というの、本物の食欲の方が猛烈にわいて来たせいで、私はおなかすくと、なんにも考えられなくなるタチである。

そうだ、ここから「ソネ」は近い。あそこで、ター坊達の演奏聴



(右上)ともえや転じて KENZO とは…。お久しぶりです／(同下)鎌や鎌、世界中で一番美しいのは？ナタリーにて／(中央上)ソネの素晴らしい仲間達よ
(同下)文化ホールの岡田美代さんとぼったり。「やあノコやないの、何してんの」ハイ取材です。にしむら北野店にて／(左)イッセイでも鎌や鎌…です

きながら何か食べよう。

月曜日は、女性ヴォーカルの愛さんが出演の日で、ハウストリオをバックに、私の大好きな、ビリーホリデイの「ラヴアーマン」なんて歌ってくれちゃって、もう御気嫌なのなんのって。肉のたたきがおいしいのです。他にカラ揚げとイカのチーズはさみ揚げを食べて、水割りも三杯程、あー、えー気持になって来た。演奏終えたトリオやママとワイワイのお喋りも、一日の疲れをいやしてくれる。

今夜はまだ、家に帰ってレコード四枚聴かねばならない、明日放送のネタ仕込みで本もパラパラと一冊読まねばならない。

そんな事をふと思い出しながらソネを後に、「にしむら」へむかう。大体私の三宮の夜のコースのおしまいは、いつもここである。ゆったりと椅子に坐って、ぼんやり窓の外の雨の音を聴く。ちょっと小説の主人公になったみたいな雰囲気。

と思ったら、「やあ、ノコ、なにしてんのん？」文化ホールの岡田さん、横にどりと坐って、ムードはもうくもこわれ去った。女一人、仕事でつっぱって生きてる時もあるけれど、神戸の街はいつでも、「そない肩ひじ張らんと楽しいいこうよ」と言ってくれる。ほんとに、大好き。